研究ノート

教師として求められる資質の考察
―授業力を高める実践とその考察―

○西村　眞*1　岡野亮介*2

キーワード：教師、資質、授業力、授業力の視点

１．教員としての資質

教員としての資質については時代により変化するものと変わらないものがあるが、教師としては常に専門職として授業力が試されている。しかも授業力は高い学　力を保障するものとして求められている。ここではまず教員の資質を考察し、それらを基にした授業力のあり方を実践を通して考察していきたい。

まず教員の資質についての考察は次のようである。

①現状と課題

○グローバル化や情報化、国際化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、高度化複雑化する諸課題への対応が必要で、学校教育において求められる人材育成像の変化への対応が必要である。

○生きる力を育成するため、これからの学校は基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力の育成を重視する。

○新たな学びを支える教員の養成と、学び続ける教員像の確立が求められる。

○いじめ・暴力行為・不登校への対応、特別支援教育の充実、ＩＣＴの活用など諸課題への対応も必要となる。

○教育委員会と大学との連携・協働により、教職生活全体を通じて学び続ける教員を継続的に支援するための一体的な改革を行う必要がある。

②これからの教員に求められる資質能力

（１）教員に求められる資質能力（その１）

平成９年（1997）教育職員養成審議会の答申においては社会的な背景と社会の期待及び国際的な視野から求められる資質能力は以下のようである[1,2]。

○社会の大きな変動に対応しつつ、国民の学校教育に対する期待に応えるためには教育活動の直接の担い手である教員に対する揺るぎない信頼を確立し、国際的にも教員の資質能力がより一層高いものとなるようにすることが重要である[1]。

○教員に求められる資質能力については、これまでも提言が行われている。平成９年（1997）の教育職員養成審議会の第一次答申においては、いつの時代にも求められる資質能力と、変化の激しい時代にあって子どもたちに「生きる力」を育む観点から、今後特に求められる資質能力等について、以下のように示している。

①いつの時代にも求められる資質能力

教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力

②特に求められる資質能力

地球的視点に立ち行動するための資質能力

（地球、国家、人間等に関する適切な理解、豊かな人間性、国際社会で必要とされる基本的資質能力）

変化の時代を生きる社会人に求められる資質や能力

*1 北九州予備校
*2 至誠館大学　ライフデザイン学部

（課題探究能力等に関わるもの、人間関係に関わるもの、社会の変化に適応するための知識技術）
教員の職務から必然的に求められる資質能力
（幼児、児童、生徒や教育の在り方に関する適切な理解、教職に対する愛着、誇り、一体感、教科指導、生徒指導等のための知識、技能、及び態度）
③得意分野を持つ個性豊かな教員
画一的な教員像を求めることは避け、生涯にわたって資質能力の向上を図るという前提に立って、全教員に共通に求められる基礎的基本的な資質能力を確保するとともに積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長を図ることが大切であること[1,2]。

（２）教員に求められる資質能力（その２）

平成 17 年(2005)10 月の本審議会の答申**「新しい時代の義務教育を創造する」**においては教員の条件について大きく集約すると３つの要素が重要であるとしている[1,3]。

① 教職に対する強い情熱
教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など

② 教育の専門家としての確かな力量
子どもの理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導、授業づくりの力、教材解釈の力など

③ 総合的な人間力
豊かな人間性や社会性、常識と教養、対人間関係力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくことなど

○変化の激しい時代だからこそ変化に適切に対応した教育活動を行っていく上で、これらの資質能力を確実に身につけることの重要性が高まっている。

○教職は、日々変化する子どもの教育に携わり、子どもの可能性を開く創造的な職業であり、このため教員には常に研究と修養に努め、専門性の向上を図ることが求められている。教員を取り巻く社会状況が急速に変化し、学校教育が抱える課題も複雑で多様化する現在、教員には不断に最新の専門的知識や指導技術等を身に付けていくことが重要となっており、「学びの精神」がこれまで以上に強く求められる[3]。

（３）教員に求められる資質能力（その３）

平成 24 年（2012）8 月　中央教育審議会の答申**「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」**は以下のようであるが、基本的な考え方には変わりないが新しい用語や概念を取り入れている[1,4]

○社会からの尊敬・信頼を受ける教員、思考力・判断力･表現力等を育成する実践的指導力を有する教員、困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する教員が必要である。

○教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力をもち､学び続ける存在であること（学び続ける教員像）など[4]

（４）教員に求められる資質能力（その４）

平成 27 年（2015）12 月中央教育審議会の答申**「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」**[5]

○自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結び付け構造化する力などが必要である。

○アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ＩＣＴの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量を高めることが必要である。

○「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が必要である。

このことから教員に求められる資質能力については以下のようである。

①教職に対する使命感や責任感及び教育的愛情

○教職に対する責任感、探究力、教職全体を通じて自主的に学び続ける力

②専門職としての高度な知識・技能

○教科や教職に関する高度な専門的知識
グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む

○新たな学びを展開できる実践的指導力

・基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力

○教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力

③総合的な人間力

○豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力
地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力

２．授業力の視点

授業力とは「子どもの主体的な活動を支援し、確かな学力を保障する力」と位置づけてその視点をいくつか設定して授業の考察を図る。授業を構成する上で必要ないくつかの視点を組織で話し合い、共通理解したのち授業研究会を実施して教師力の向上を図るとともに教育技術を磨く機会として捉えることが大切である。また、達成感のあるものにするとともに新しい課題を見つけて教育活動に専念できるものにしていきたい。

①子どもの学力を把握して多様に理解する。
子どもの学力を多様な視点からとらえて授業の単元に必要な学力の把握に努め、できるだけ情報を活用する。

②教材を深く研究して、指導案に反映し工夫のあるものにする。
実践記録の情報を整理し、自分の授業力に照らして指導案を作成し自分としての指導案で実践できるようにする。子どもの実態に即し主体的な活動ができる展開を考える。

③確かな指導法を蓄積して授業を展開する。

・子どもが問い続ける支援を図る。
・発問を工夫し、第１、第２のなぜ？を大切にする。
・板書を工夫し、生きた教材として構成する。
・アクティブラーニングの考え方を導入する。活動と学びの一体化を図る工夫をする。

④高まり合う学習集団をつくり、授業に貢献する態度を培う。

・積極的にコミュニケーションを図り、方法を身につける。
・学級集団を学習集団に高める。
・授業に貢献できる子どもを育てる。貢献度を価値づける。

多様な視点から授業をとらえ、実践してそれらの視点から分析考察し課題を追究するとともに、次なる課題を見つけていきたい。

３年生の体育の授業実践を取り上げ、これらの視点から分析して授業者に伝え、授業を展開するとともによりよい実践にできるよう助言した。以下は指導案とその実践記録及び授業の視点別の考察である。市全体の授業研究会であり専門の指導者を招聘しての会なので授業者にとっては自分の教師力向上の機会としてとらえ、悩みながら今自分にできることを実践できたので達成感があり、次の課題も見えてきたようである。

第３学年体育科学習指導案

指導者　○○○○

１　単元名　「　ころりんピック　２０１９　」　（Ｂ 器械運動　　ア マット運動）

２　指導観

（１）児童観（男子 19 名、女子 17 名、計 36 名）

本学級は、休み時間に運動場で遊ぶ児童が少なく、半数以上が室内で過ごしている。そのため、運動習慣が身に付いているとは言えない。

運動に関する事前アンケートを行ったところ「運動をすることは好きですか」ということに対して２３名が、運動に対して肯定的な考えであった。しかし、「マット運動は好きですか」の質問に対して、「好き」と答えた児童は１２名だった。理由として、「あまりできないから楽しくない」「回れない」「頭が痛くなる」があげられた。また、「前転がり」はほとんどの児童ができるが、「後ろ転がり」は苦手な児童が多かった。事前調査から、転がる、逆さになるなどの運動に対して、技能面や興味・関心などの個人差が大きいことが分かった。

そこで、本単元の学習において、友達との教え合いや関わり合う活動を通して、できるようになることの楽しさや連続して回ることの心地よさを味わわせたい。また、苦手な児童も積極的に取り組むことができるように単元を通して、場や教具の工夫を行うとともに、発表会に向けての演技づくりに取り組ませるようにする。

（２）教材観

中学年の器械運動「マット運動」では、器械運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、基本的な動きや技を身に付けるようにし、高学年の器械運動の学習につなげていくことが求められる。

本単元では、運動を楽しく行うために、自己の課題を見付け、その解決のための活動を工夫するとともに、きまりを守り誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたり、場や器械・器具の安全に気を付けたりすることができるようにすることをねらいとしている。

本単元における「運動を楽しんでいる児童の姿」を「できるようになることの楽しさや技を組み合わせたり連続して回ったりする姿」ととらえる。また、「主体的に学び、学びを活かす姿」とは、「自分の課題を解決するために場を選んだり、友達の動きを見てよい動きを見付けたり、アドバイスしたりする姿」と設定し、チーム内の教え合いを活発にすることをねらうようにする。

（３）指導にあたって

○「主体的な学び」へと導く手だて

・導入時に、基本となる技や組み合わせ技を教師の演技により紹介することで、目指す姿の具体的なイメージの見通しをもち、意欲的に学習に取り組めるようにする。
・「前転、後転、開脚後転」と「壁倒立、側方倒立回転」を重点的に練習することで、自己の能力に適した課題を明確にさせ、ねらい沿った教え合いができるようにする。
・発表会に向けての演技づくりを行い、苦手な児童も積極的に取り組めるようにする。
・振り返りカードを活用することで、自分や友達の動きの伸びについて記入できるようにする。

○「学び合い」の活性化へと導く手だて

・４人～５人１組のチームで活動することで、個人技能による「できる」「できない」だけではなく、友達との教え合いや関わり合いの中で「できるようになる」楽しさを味わわせながら運動に取り組むことができるようにする。
・技のポイントを短い言葉や擬態語で表現させ掲示することで、それらの言葉を使った教え合いをしやすくする。
・よい学び合いができているチームをモデルとして紹介し、学び合いが活発にできるようにする。

３　単元目標　（試案）

知識及び技能	①　自己の能力に適した回転系や巧技系の基本的な技を知り、行うことができる。 ②　自己の能力に適した回転技や巧技系の繰り返しや組み合わせを行うことができる。
思考力、判断力、表現力等	①　自己の能力に適した課題を見付けることができる。 ②　技ができるようになるための場や活動を選ぶことができる。 ③　課題解決のために考えたことを友達に伝えることができる。
学びに向かう、人間性等	①　マット運動で、回転技や巧技系に進んで取り組むことができる。 ②　場や器械・器具の安全に気を付けながら、誰とでも仲よく励まし合うことができる。

４　指導計画

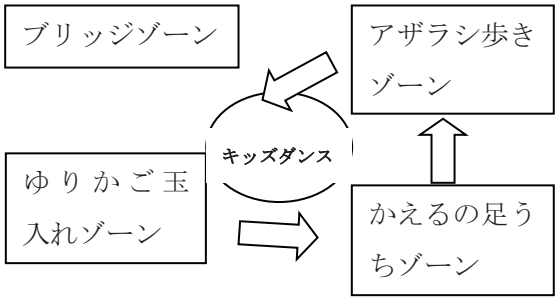
※　別紙「単元構想図　(試案)」参照

５　本時の学習（３／７）　令和元年１０月１１日（金）　第５校時　於：体育館

（１）主　眼　チームの友達との見合いや教え合いを通して、自己の能力に応じた技を選び、自分の演技をつくることができるようにする。

（２）準　備　マット、踏切板、紅白玉、かご、スポンジ、ＣＤラジカセ

（３）展　開

主な学習活動・内容	○　指導・支援上の留意点 【観点】評価規準（評価方法）
１.準備運動をする。  	○　キッズダンスを取り入れながら楽しく運動ができるようにする。 ○　主運動で基本的な感覚を養うための動きを取り入れ、楽しく運動させながら身に付けさせるようにする。 ・くま歩き ・かえるの足うち ・ゆりかご玉入れ ・アザラシ ・ブリッジ
２．本時のめあてを設定する。	○　前時を想起させ、本時のめあてへとつないでいくようにする。
めあて　チームの友だちと教え合い、自分のえんぎをつくろう。	
３．技のポイントを確認する。 ○　全員で前転、後転、開脚後転のポイントを確認する。	○　前時までの学習を基に、前転、後転、開脚前転のそれぞれのポイントを確認し、自己の能力に適した技を選ぶようにする。

【前転】

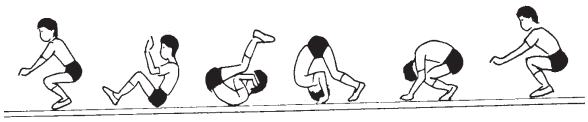
おしりを頭よりも上げる。

おへそを見ながら回る。

両手を前に出して立つ。

グッ　ピョン　クルリン　パ！！

【後転】



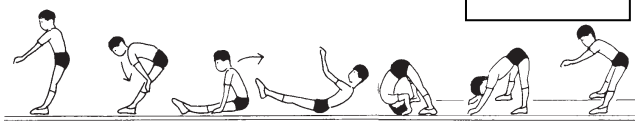
ピタ　スー　クルリン　パ！！

【開脚後転】

あごをひいて、おへそを見る。

足が頭の上にきたら、開く。

マットを強くおして立ち上がる。



グッ　ピョン　クルリン　グッ　パ！！

4．各自が課題とする技の練習をする。

・平坦なマットと坂道マットを使って練習する。

・「みぞクッションコーナー」や「肋木コーナー」を全員で準備し、自己の課題に応じた練習の場を選ぶ。

・チームのみんなで互いに教え合う。

・金銀銅カードを使い、自己の課題を見付けることができる。

○　課題に応じた場を選んで練習したり、互いに教え合ったりできるようにする。

○易しい場

・坂道、やや坂道⇒回転力をつける。

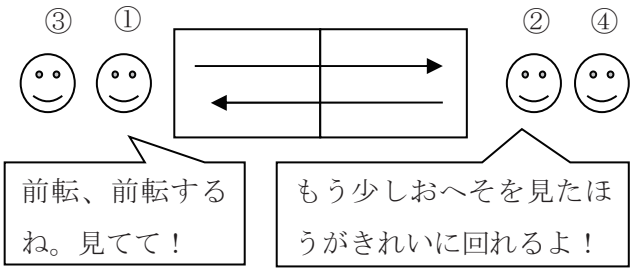
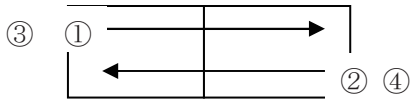
・みぞクッション⇒マットを両手で押し、頭を抜きやすくする。

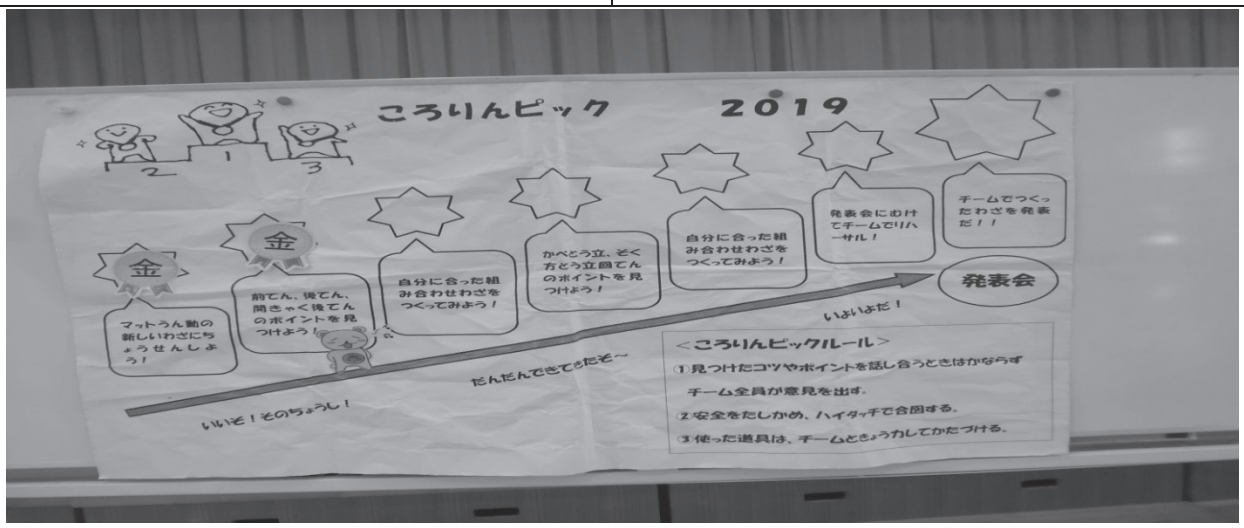
・肋木⇒しゃがみ立ちから回転力をつける。

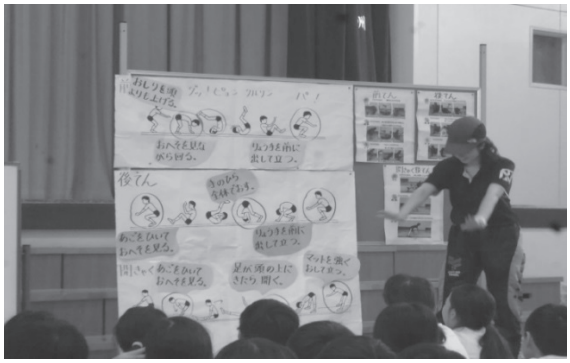
○　互いの動きを見合いアドバイスをし合う際に、擬態語を使った技のポイントを基に見取り、アドバイスをし合うようにする。

○　よい学び合いができているチームをモデルとして紹介し、学び合いが活発にできるようにする。

【思・判】技ができるようになるための活動を選ぶことができる。（ワークシート・発言分析）

5．チームで組み合わせ練習をする。 ・チームで互いの動きを見合いながら発表会に向けての演技をつくる。  ○　交互に演技をしあう。  ・「①→ハイタッチ→②→ハイタッチ→③→ハイタッチ→④→決めポーズの流れで行う。」	○　見合う視点を確認し、一人一人に具体的な声かけができるようにする。 ○　チームごとにホワイトボードを活用して、技の順番や組み合わせを確認しながら演技をつくることができるようにする。 ○　演技の方向や場の安全を確認させ、安全に練習するように声かけをする。
6．本時の学習を振り返り、整理運動を行う。	○振り返りカードに記入した後、自分や友達のがんばり、高まったことなどを発表させ、次時の活動を確認したりする。





４．視点別の考察と課題

（１）視点別の考察

①子どもの学力を把握して多様に理解する。

運動能力と各演技の習熟度を把握して一覧表にして授業に臨む。一人一人により違う実態を十分把握していて細かい指導がなされた。演技はできるところから始めるので単元の初めにしっかりチェックすることがポイントである。運動能力だけでなく、性格も考慮した配慮が必要である。教師が能力や習熟度など細かく把握するのに余念がなかった。

②教材を深く研究して、指導案に反映し工夫のあるものにする。

まず、単元構想を作成して終末に発表会をするという設定で単元を通して意欲的に活動できる工夫夫がなされていた。またそれぞれの活動ごとに発問や指示が的確になされ子どもが主体的に活動することできた。学習カードも工夫され金メダルというキーワードも効果的であった。３時間目で演技ができるようになってきたのもこれらの支援の効果である。

③確かな指導法を蓄積して授業を展開する。

２年目の教員なのでその教員の授業力を考慮して共同で指導案を作成し、本人の考えをしっかり聞いてできることと困難なことを仕分けする作業をしたのち細かな指導法を展開できるように工夫した。体育の専門教授の意見も参考にしながらこの展開にまとめあげたものである。子どもは自分の動きをしっかり工夫していたし、形成的評価ができていた。学習カードには本時の自分のめあてを書き、その動きを繰り返すことで達成することができたか評価することにより、確認をしながら次の動きを考えることができていた。単元を通してこの活動を継続することでスムーズな動きを獲得できていったことは評価できる。

④　高まり合う学習集団を作り、授業に貢献する。

グループでお互いに話し合い、演技を続けることによりできるように工夫をしていた。モデル的な演技をする子どもは授業に貢献しているととらえ、しっかり価値づける教師の言葉と他の子どもの賞賛を促す教師の言葉が効果的であった。

（２）課題

課題としては授業づくりにおいて教師が次の研究も楽しいと感じられる達成感を味わうことが肝要であり、生き生きとした教育活動が行われるよう励ますことが研究のもう一つの目的であることを確認した。

引用文献

1)教員免許状更新講習事業コンソーシアム(2009)『教職リニューアル』ミネルヴァ書房, 30- 47

2)文部科学省(1997)『教育職員養成審議会答申』,114

3) 文部科学省(2005)『教育職員養成審議会』,18-19

4) 文部科学省、(2012)『中央教育審議会答申』,1-4

5) 文部科学省 (2015)『中央教育審議会答申』,9-11

参考文献

1)千葉大学教育学部付属教員センター（2015）『教育の最新事情』（1 版）福村出版

2) 千葉大学教育学部付属教員センター（2018）『教育の最新事情』（2 版）福村出版

3) 文部科学省 (2018)『小学校学習指導要領　体育編』東洋館出版

4) 北九州市教育委員会(2019)『北九州市体育向上プログラム』,45

5) 細江利他（2017）『体育の学習』光文書院

6) 梶田叡一、山極　隆（2018）『教育の最新事情』ミネルヴァ書房

7) 清水　由(2018)『体育授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版

8) 白幡和也(2018)『小学校　これだけは知っておきたい体育授業の基本』東洋館出版